



Title	民藝のディアスポラ：現代における刺し子の流行をめぐって
Author(s)	
Citation	令和3（2021）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書．2022
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85587
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和3年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな氏名	にしだ なお 西田 那央	学部 学科	文学部人文学科	学年	3 年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	高安啓介	所属	文学研究科		
研究課題名	民藝のディアスポラ-現代における刺し子の流行をめぐって-				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

【研究目的】

民藝はもともと地域に根ざした産物として、地域において「伝承」されるべきものと考えられてきたが、今日では、地域における民藝の「伝承」があやうくなるなかで、民藝はいまや「手芸」として SNS などをとおして地域を問わず「伝播」している。本研究は、こうした状況があるものと想定して、刺し子のなかでも、こぎん刺しに注目して、現代における民藝の意味をあらためて問う。「民藝」の文脈で評価されてきた工芸品が今後どのように受け継がれていくのか考える一助となることを目指す。

【研究計画】

刺し子の中でも、資料が多く残り、現在も発祥地の青森県で生産・販売が行われている「津軽こぎん刺し」に注目し調査を行う。1)地域性、技法・図案が忠実に受け継がれている事例として、かつて柳宗悦の薫陶を受けた、こぎん刺しの研究の先駆者、横島直道氏が設立した有限会社「弘前こぎん研究所」で、取材・調査を代表者の成田貞治氏に行う。2)発祥地域ではこぎん刺しがどのように活用・受容されているか、青森県弘前市で調査を行い、事例を集める。3)発祥地域を離れた伝播の事例として、青森県外でこぎん刺しの制作・販売・指導を行っている個人にたいして取材を行う。4)SNS、動画投稿サイト、書籍を参照し、制作方法や図案の変化、伝播の方法を見る。5)調査を通して得られたデータを整理・比較し、結論を得る。

【研究方法】

研究計画を元に実行し、実地調査及び取材を行った。最終的に成田氏の協力を得て、弘前こぎん研究所に加え、こぎん刺し作家、弘前市産業振興課など合計 10 名に対して取材を行った。この他、SNS、書籍、TV、新聞による伝播について件数や内容を元に調査をおこなった。

【研究経過】

7 月 文字資料の収集、取材相手の選考

8 月 こぎん研究所所長成田貞治氏に取材交渉、実地調査にむけての準備

9 月 青森弘前市にむかう。成田貞治氏、成田弘美氏、佐藤陽子こぎん展示館の佐藤陽子氏、川村正弘氏、「green」店主小林久芳氏、弘前市商工部産業育成課に取材。弘前市内で実地調査を行う。

10 月 取材データの整理及びこぎん刺し作家の竹下絵里子氏への取材交渉、取材の実施

11 月 報告書の作成及び日本工芸博覧会の視察

12 月 書籍の調査及び報告書の作成

【研究成果】**〈用語解説〉**

・こぎん刺し…津軽藩でうまれた刺し子の技法及び衣服のことを刺す。保温・補強を増すために、藍で染めた麻布の仕事着に、白の木綿糸でモドコとよばれる幾何学模様を刺していく。江戸時代に発生し、明治期に発展をとげたが、その後綿布の導入により衰退。柳宗悦が民藝として評価し、横島直道らの手によって研究、再び生産されるようになった。

【第 1 章】 発祥地域におけるこぎん刺しの現在**〈第 1 節〉 発祥地域での伝承**

弘前こぎん研究所と弘前市市役所に取材を行い、現在の制作状況について情報を得た。弘前こぎん研究所とは、先述した横島直道氏が木村産業研究所を前身として 1962 年に初代所長として就任した有限会社である。名の通り青森県弘前市に拠点を構え、現在もこぎん刺しの制作、販売、普及の中心となっている。今回は弘前こぎん研究所 3 代目所長である成田貞治氏の協力を得て、制作状況、普及活動について取材を行った。成田氏は「地元津軽の人は一回でもこぎん刺しを刺したことが有るようにしたい」との考えを持ち、「発祥地での活用」で後述するように、行政と積極的に連携しこぎん刺し

の活用を考案している。広報活動としては、弘前の学校施設での講演、様々な企業とのコラボ、全国の百貨店での販売、台湾・イタリア・フランス・ロシア・中国での販売やワークショップがあげられる。弘前こぎん研究所の社は重要文化財として登録されており、訪問客が自由に建物を見学でき、商品を購入することもできる。加えてこぎん刺しに関する説明のビデオを視聴できる他、日本語・英語・韓国語・繁体字中国語・簡体字中国語によるリーフレットを配布している。

弘前こぎん研究所の特徴として、組織だった生産を行っていることが挙げられる。従業員数 7 名に加え、刺し手約 90 名、加工約 13 名を家内職として雇用関係を結び、こぎん刺しを生産している。7 名の従業員は、こぎん刺しに適した形になるよう糸の縫いや麻布の織り、仕上げや検品に加え、制作も行っている。この麻布と木綿糸を刺し手に手渡す。渡される量は個人の熟練度や制作スピード等でそれぞれ異なる。完成した製品はこぎん研究所に送られ、アイロンや糸の処理などの仕上げを経て販売される。ポーチや鞆等日用に使えるようなものからアクセサリ等、多様な商品が制作されている。また、帯やベストなど、制作に時間と高度な技術が必要なものは熟練の職人に任される。衣類に関わる仕事についていなくとも、技法の習得自体は比較的容易であるため、年齢・性別に関わらず刺し手となることは可能である。こぎん刺しを刺すことで収入を得られる、元来使われていた素材に近いものを使える、技法や知識を熟練の刺し手から得られるという環境を研究所が提供していることで、本来の「こぎん刺し」の伝承を可能にしていると言える。

成田氏は全国へのこぎん刺しの普及に取り組む一方で、様々な形のこぎん刺しが拡散することにより、本来のこぎん刺しが正しく継承されないことを危惧している。対策のひとつとして、弘前商工会議所と連携、手縫い・麻と木綿の利用等を条件にした、より本来のこぎん刺しに近い手法でつくられたものを「津軽こぎん刺し」として認定できるよう、地域団体商標の取得を目指している。

・行政の取り組み

弘前こぎん研究所に加えて弘前市商工部産業振興課にも取材を行った。弘前市は積極的に弘前市の工芸の振興に取り組んでおり、工芸に関する 5 つの施策を行っている。こぎん刺しは弘前市の代表的な工芸として施策の中に組み込まれている。特に施策の内の一つ、地域産業魅力体験事業では、「弘前市が持続的に発展していくために、次の時代を託す、地域を担う人材を育成する」ことを目的に、小中学生を対象に工芸品の制作体験や工場見学が実施されている。普段工芸品を生活のなかでは見ない、使わない子供達にとっても身近な存在となるよう目指す活動を行っている。加えて弘前市の商工業・農業などの地域産業に関わり、審査委員による審査と認定基準をクリアした技術者を「弘前マイスター」として認定、小学校等に技術指導や体験講座に派遣するといった制度がある。平成 24 年度には「刺しゅう工」として当時弘前こぎん研究所に勤務していた三浦佐知子氏が弘前マイスターとして認定されている。また、青森県史 30 巻、文化財編美術工芸第 5 章工芸の展開 2 節染織工芸の分野として、こぎん刺しを追加、編纂しオンラインでも全文公開している。

〈第 2 節〉発祥地域での販売

販売する視点からこぎん刺しの伝播をどうとらえているのか考えるために、弘前市内でこぎん刺しのオリジナル商品を扱うセレクトショップ“green”店主の小林久芳氏に取材を行った。小林氏は「人と地球に優しい」をテーマに商品を取り扱い、こぎん刺しに特化したオンラインショップも開いている。販売を通して門戸を広げ、より多くの人にこぎん刺しをしってもらいたいと考えているが、純粋にこぎん刺しが元より好きだという人々に支えられているのが現状だという。観光客にお土産として購入されることも多いが、“使って”初めてよさが分かる商品であり、説明パネルを設置する、こぎん刺しの説明が書かれた付箋を同封するといった工夫をしても、伝えきれない部分があるのではと感じている。どこまで・どのように伝えるべきか模索中であるとのこと。また、小林氏はこぎん刺し自体

が変化する必要はないと考える一方、今後は研究所だけでなく個人作家の商品も広めていきたいと考えているという。こうすることで多様なオリジナル商品が出、より多くの人の感性や需要を満たし、全体のクオリティを上げることに繋がると考えているためである。販売する側ならではの視点、方法での伝播方法であると考え。

〈第 3 節〉発祥地域での普及と活用

市内のクラフトショップ、工房、ギャラリーが掲載されたクラフトマップの作成、セレクトショップや企画展の支援、県外・海外での特産品の販売イベントの開催等を通して、市民や県外への発信・消費拡大を図る。発祥地での活用例の特徴として、観光の面での活用があげられる。こぎん刺しのモドコが取り入れられていた場所としては、青森空港、JR 弘前駅、弘前市土手町歩道、弘前市市役所、弘前城前スターバックス、ヒロロスクエアがあり、モドコの転写、こぎん刺しによる装飾がみられた。また弘前にはこぎん刺しを専門的に展示する施設、団体が複数存在する。弘前こぎん研究所以外に 19 件、中でも佐藤陽子こぎん刺し展示館はこぎん刺しを専門的に展示しており、古作こぎんの着用体験、制作体験もできる。これに加え今年、雑誌「そらとぶこぎん」の編集者である石田舞子氏により、古作こぎんの展示を行う「ゆめみるこぎんミュージアム」が開館した。また、普段一般公開されていないが、こぎん刺し普及の先駆者である前田セツ氏が開いた「こぎんの家」も存在する。これらの情報は「弘前こぎんマップ」に纏められ、pdf 形式で配布されている。この資料によると、弘前市内にはこぎん刺しを取り扱う施設が 22 件ある。SNS の利用の有無も記され、掲載された施設全ての HP の URL が添付され、インターネットから情報を得ることにしている。

また、こぎん刺しに関するイベントも開催されている。2011 年から弘前市で開かれている「こぎんフェス」は、こぎん刺しの作家が全国から集まり、作品の販売や関連書籍、材料などを販売するイベントである。3 日間にわたり開催され、市内だけでなく県外からの来場者も含め 2019 年は、のべ 2700 人が訪れた。会場内では、古作こぎんの展示やワークショップがひらかれた。こぎんフェスの開催者である川村正弘氏によれば、中には自作のこぎん刺しの鞆や服を着用來場する人もいたという。加えて、出店しているこぎん作家のファンがついており、リピーターとしても期待される。

【第 2 章】 発祥地域を離れた「伝播」

〈第 1 節〉弘前から各地へ

弘前こぎん研究所は、阪急百貨店や高島屋等の百貨店、蔦屋書店のイベントに期間限定で出店する他、全国の工芸・民藝に関連するイベントにも出店している。2021 年は吹田市の万博公園で開かれた全国工芸博覧会に出展、3 日間にわたり販売を行った。購入者にはこぎん刺しの歴史や種類についての説明が掲載されたリーフレットが手渡され、より正確で詳細な知識を得ることができる。

全国的にこぎん刺しとコラボして商品開発を行った企業は 21 件あり、模様の転写のみは 10 件、こぎん刺しを実際に刺した所は 7 件、どちらも出したのは 3 件、引用に留まったものは 1 件であった。

〈第 2 節〉地域から地域へ

弘前市外でのこぎん刺しの展示

弘前市外でも、こぎん刺しのためのイベントが開催されたことがある。東京で「こぎんブックマーケット」とは、後述する山端家昌氏が代表取締役を務めるイエティワールド株式会社が開催した、2019 年から東京の綿商工会館でひらかれたこぎん刺し・菱刺しの作品とそれに関連する本の出展型販売イベントである。作品販売に加え、こぎん刺し愛好家の輪を更に広げていく手段として『本作り』を行い、発表・販売し交流を深める場を目指しており作品集やレシピ・漫画・写真集等も販売されている。

また、今年開催された全国の博物館施設の企画展でこぎん刺しの出品が確認できたのはサントリー美術館、横浜歴史博物館、日本民藝館、東京都美術館、国立新美術館の 5 件である。特に国立新美術

館で開かれた「日展」では現代のこぎん刺し作家の作品が 3 点出品され、そのうち 1 点は特選に選出されている。

〈第 3 節〉こぎん刺しの習得

弘前市外ではどのようなこぎん刺しを習得出来るのかについて調査した。wasabi CRAFT とプロダクト・UI/UX デザイン・開発カンパニー株式会社トリイデザイン研究所によって運営されている、こぎん刺しに関する情報発信を行うウェブマガジン、「Koginbank」によれば、恒常的にこぎん刺しが学べる教室は、全国 135 箇所ある。これに加え、オンライン上での指導も行われている。例えば弘前市でこぎん刺し用の材料や道具を販売する手芸店「しまや」では、Zoom を使ったワークショップを開催している。利用者は予めオンラインショップから zoom オンラインセミナー付きの、作成キットを購入し、当日は Zoom で説明を受けつつ制作する。リアルタイムで双方向の会話が可能なことで質問がしやすく、手順や方法があっているか、カメラを利用してすぐに確認できる。また、弘前市を訪れなくても、あらゆる地域からの参加が可能になった。参加者の年齢層は幅広く、関西からの参加者が多いという。オンラインでのワークショップが始まったのはコロナ禍を受けてのことだが、こうした利点により地域にとらわれない伝播が可能になっているといえる。

〈第 4 節〉異なる地でのこぎん作家の創作活動

他の地域におけるこぎん刺しの制作状況、変化の調査のため、「こぎん刺し絵糸」として活動されている竹下絵里子氏に取材を行った。竹下氏は、新潟県のご出身で東京に在住されている。発祥地とは異なる出身・場所で活動していることを作品に反映できればと語る。こぎん刺しを知った契機は旅番組での紹介だったという。

・習得方法

書店でみつけた技法書を参考に、こぎん刺しの伝統模様のパーツを見て覚え、模様の成り立ちを考えたという。また、博物館の展示を見に行き、模様がどんな要素で成り立ち、分解するとどうなるのかを確認しつつ、只管刺しながら習得した。

・独自の変化

制作を始めた 10 年前は、歴史的な面を考慮し、平織りの麻布・綿の糸・こぎん針を求め、小売店から弘前市内の手芸店までを探したが、中々満足のいくものは見つからなかった。一方で、民藝について調べた際、抑も民藝とはその土地で手に入りやすい物を利用していたことを知り、東京に居る自身はこの街で、手に入るものを利用してつくと決めたことから、歴史的な要素を取り入れつつもカラフルでライトな作風になった。制作方法としては図案を描かず、菱形自体を連続させることでうまれる変化の面白さを活かして刺していく。規則的なリズムでつづけているより、次々に変化するイメージだという。伝統をくずさないことを意識し、基本的に模様を創作することはない竹下氏だが、百貨店から提案を受け、こぎんのルールにのっとってアルファベットをとりこんだ模様を創作した。できあがると他のモドコと有機的に使うことができたという。異なる地域性、現代の文化を取り入れ、こぎん刺しの固有性を組み合わせることによる変化・可能性が見られる興味深い事例と考える。

【第 3 章】 地域を問わない様々な「伝播」

〈第 1 節〉TV・新聞・書籍での伝播

・TV について

今までこぎん刺しを取り上げた全国放送の番組としては、「徹子の部屋」「すてきにハンドメイド」「鑑賞マニュアル美の壺」「NHK イッピン」「ZIP!」「もういちど、日本」「こんなステキなにつぼんが」「みらい遺産」「デザイントークス+」が挙げられる。(2014 年～2021 年) これに加えて青森朝日放送、RAB 青森放送、東日本放送等の放送地域が限られる放送局でも複数回ニュースの中で取り上げ

ている。全て放送が終了しており、視聴が不可能であったため分析を行えなかったが、青森朝日放送、RAB 青森放送、東日本放送等地域を限定した放送では、こぎん刺しの最新のニュースについて取り上げている傾向があった。

・書籍について

現在 Amazon で「こぎん」と入力、検出された物の内現在も購入が可能かつこぎん刺しについて触れている書籍を対象に調査を行った。検出された 37 件の内 14 件に調査を行った。14 件中「こぎん刺しについて歴史について触れている物は 6 件、単語の説明のみに留まる物は 5 件、説明のないものは 1 件だった。10 年以内に出版されたものに絞れば、10 件中 9 件が技法書・図案集で歴史・経緯の説明については簡単にしか触れられていない。

新聞について

青森県内で主に購読されている朝刊単独の地方新聞である「東奥日報」では 2018 年～2021 年にかけてこぎん刺しに関する話題を 18 回取り上げている。他、朝日新聞社、弘前経済新聞社、Yahoo Japan ニュース、佐賀経済新聞、日本経済新聞が web 上でこぎん刺しを取り上げている。こぎん刺しの説明には多寡があり、“こぎん刺し” そのものは何か、について触れている記事は少ない。

〈第 2 節〉インターネットでの伝播

・SNS での発信

弘前から SNS を通しての発信に関して

先述した“こぎんマップ”によると弘前にあるこぎん刺しの関連施設において SNS を利用しているのは 12 件で、その多くが Facebook を利用している等、何らかの SNS の利用が見られる。一方で、取材の中では「こぎんフェス」の開催を担った川村正弘氏を除き、SNS の利用に関しては消極的な回答が多く見られた。SNS に詳しい人材がいない、アカウントはもっていても使わない等と理由は様々である。一方で、こぎん刺しに深く関係しており、SNS を通し盛んに情報発信をしている人物としては山端家昌氏が挙げられる。青森県出身のグラフィックデザイナーである山端氏は、現在は東京に在住しつつ、“津軽こぎん刺し模様をこれからも大切にしていけるためのデザインプロジェクト”である「kogin.net」の主宰を務め、こぎん刺しに関する情報発信を SNS や HP を通じて発信している。様々な企業から販売されたこぎん刺しの商品や、こぎん刺しに関するイベント、こぎん刺しに対する自らの考えなどを積極的に発信しており、弘前のこぎん刺し作家や団体と交流、その活動を紹介するなど、弘前市外からこぎん刺しの普及・活用するためのツールとして SNS が有効に活用されている。

・個人の発信

投稿数が膨大であり、調査期間が限られているため、今回は精密な調査を行わず投稿件数とタグを利用して、こぎん刺しに関連するワードから傾向を調査した。そのため、タグごとに投稿件数が表示される Instagram をつかって調査を試みた。まずハッシュタグ、#こぎん刺しでの投稿数は 16.6 万件（11/3 時点）、#こぎん刺しを含む関連タグは、#図案、#コースター、#初心者、#バッグ、#（こぎん刺しの）ある暮らし、#ブローチの六種類が検出された。本来の目的である保温・補強の技術としてではなく、身の周りのものへの装飾目的での使用の傾向がみられる。また、初心者同士の交流、作家に対して客も気軽にアクセスすることができる場としても機能しているようである。

〈第 3 節〉通販と動画サイト

・通販による伝播

通販も発祥地を離れた人々がこぎん刺しに知る、挑戦できる機会を提供する方法であることから、伝播の一種として取り上げる。ここでは発祥地を離れた伝播であることを念頭におき、弘前市の関連企業・小売店の直接的な販売でないこと、どこからでもアクセスができるオンラインショップである

ことの二つを条件とした。手芸用品を中心に扱う通販サイトとしては、「ユザワヤ」、「HOBBYRA HOBBYRE」、「Tokai」、「ドリーム」、「iichi」、「minne」の 6 つを、総合通販サイトとしては「Amazon」「Rakuten」「モノタロウ」「Yahoo!ショッピング」4 つの通販サイトを取り上げる。「ユザワヤ」では、70 件、「HOBBYRA HOBBYRE」は 7 件、「Tokai」は 144 件、「ドリーム」では 6 件が検出された。「Amazon」では 588 件が検出されたが、他の地域の刺し子やクロスステッチ、刺繍なども同時に検出され、混同が見られた。このような混同は「モノタロウ」及び「Rakuten」、「Yahoo!ショッピング」の他、手芸用品を扱う「iichi」、「minne」でも見られた。「モノタロウ」においては 20 件のうち、こぎん刺しであったものは 6 件であった。「Rakuten」では、4886 件が検出、「Yahoo!ショッピング」は 10322 件、「iichi」983 件、「minne」は 1517 件が検出、同様に異なる刺し子や商品が見られた。この結果は検索システム上の不備や、刺し子と刺繍、あるいは刺し子内での区別が進んでいないことが原因と思われるが、こぎん刺しをよく知らない利用者の誤解、混同を招く恐れがあると考え。

・動画について

今回は大手投稿配信サイト、YouTube で調査を行った。選んだ理由としては動画投稿利用者数が他のサイトと比較して最多であること、無料で誰でも投稿できる点で様々な人が利用しやすいと考えたからである。YouTube 上で「こぎん刺し」と検索すると関連ワードが多数出てくる。投稿されている動画の数は 200 件以上あり、その多くが刺し方の説明や制作風景に関するもので個人作家やこぎん刺しのキットを販売している企業による投稿だった。歴史や背景をメインにした動画は数件であり、殆どが東北の関連する団体や企業の公式チャンネルから公表されたものであった。

終章 伝播していくこぎん刺しにみる可能性

こぎん刺しは様々な媒体で提供され、どのような地域でも名前や技法や図案を容易に知り、材料も簡単に手に入れることが可能になりつつある。一方で、他の刺し子や刺繍との混同、説明が省略されている、こぎん刺しと言いがたいものも多く見られた。これらの現状から、“こぎん刺し”そのものについて、正確な知識が広まっていくのは難しく、混同されながら変化していくことが予想される。地域に根づくもの、無我無個性の美しさを重視した柳からすれば、現代のこぎん刺しは民藝とは言い難いと考えられるだろうか。しかし、柳自身著書「手仕事の日本」の中で“今も冬はあり今も女たちはあり今も技が残るのですから、こういう刺子こそ何か新しい道で活かすべきではないでしょうか。”と述べている。発祥地の弘前市では、こぎん刺しを様々な形で活用しつつ、弘前市に住む誰にとっても馴染み深い技術となり得るような活動や、こぎん刺しを本来の形に近いままで伝承・保護する動きがみられる。弘前市以外の地域においても、“こぎん刺し”が習得できる場所や知る機会が提供されている。加えて、地域性や時代を反映した新たなこぎん刺しの創出も各地で伺える。このことを踏まえれば、こぎん刺しは従来の文脈を外れたことで、多くの人に親しみやすい形となり、普遍的な技術として再生され、現代の生活に取り入れられようとしているのではないか。この点では、こぎん刺しは新たな形で“民藝”の性質を一部受け継ぎ、理想を実践しているともいえるのではないだろうか。

参考文献

石田舞子、鈴木真枝、小畑智恵「そらとぶこぎん」5号（2021）

上羽陽子、山崎朋子編「現代手芸考：ものづくりの意味を問い直す」第1版（フィルムアート社、2020）

橋本夕紀夫「LEDと曲げわっぱ：進化する伝統デザイン」第1版（六曜社、2013）

『民藝』編集委員会「民藝；棟方志功と東北の民藝」825号（2021）

「弘前マイスター：Hirosaki Meister」弘前市商工部産業育成課（2021）

申請先学部

文学部 採択番号 No.3